



「絶対的？」なもの

長 裕幸¹

この度、2015年4月より新しく土壌物理学会の会長に就任致しました、長 裕幸です。溝口前会長が頑張って推進されてきた路線を、今後とも発展させていきたいと思っております。特に、学会活動のIT化に関しては、学会の目玉として充実させていきたいと思っておりますのでどうぞ宜しくお願い申し上げます。

前回、この巻頭言を書かせていただいたのは2009年で、事務局の庶務幹事として、現在のような「土壌の物理性」のA4版化と装丁の一新を行ったご褒美として、最初の号の表紙にフィンガリングの写真も一緒に載せていただきました。当時は、目先の問題を解決することだけを考えていて、この6年後のことなど想像だにしていませんでした。ただ、ちょうど新公益法人法が施行され、全国1700学協会が、その団体区分によりランク分けされ、統廃合されていくのでは、という危機感がありました。現状はというと、税金の納付が厳密になったのは確かですが、外圧ではなく、むしろ学会員の減少という内圧の方がはるかに大きな問題になっています。これは、団塊の世代の退職に伴い、ほとんどの学会も同様で、本学会に限った問題ではないかもしれませんが、解決して行かないと学会の未来はありません。やはり、若い世代に支持されるような学会に生まれ変わっていく努力が必要不可欠だと思われまます。

米国土壌科学学会に入っていると毎月CSA newsという雑誌が送られてきます。いつも斜め読みしているのですが、5月号の後ろの方に、博士課程に入ったばかりの女子学生が「大学院生活のバランスを保つうまいやり方」という寄稿をしていました。学校で研究室に閉じこもっていないで、いろいろな人とふれあって、経験を高めていくと研究もはかどりますよと言っていますが、具体的に次の五つの方法を提案しているのは印象的でした。

1. 心と身体をリフレッシュさせよう
2. 多くの友人関係を築こう
3. 校内の居心地のいい場所から外に出てみよう
4. 自分が情熱を持てるものを追っかけよう
5. いろいろな研究仲間を作ろう

まさに、今の自分にも、ぴったり当てはまる内容で、寄稿する勇気に感心すると同時に、自分が博士課程に入ったばかりの頃を振り返らずにはいられませんでした。

今年は、国際土壤年で、土壌物理学会としても、若い人たちへの企画の一つとして、「何故自分は今の道に入ったのか」という寄稿を募集しました。発起人の一人として自分の経験を述べさせてもらいますと、学会長としては、あまりふさわしくないかもしれませんが、私の博士論文の題名は、「干拓貯水池の淡水化過程に関する研究」で、底面から絶えず塩水が浸入してくる干拓貯水池において、淡水の利用を目的とした、淡塩水密度界面の安定化が主なテーマでした。底泥からの塩分の溶出を扱った部分は土壌物理的だったかもしれませんが、ほとんどは水理学的な内容でした。土壌物理学に接したのは、1989年に文科省の在外研究でアメリカに滞在していた折に、2週間ほど、父の友人であったマサチューセッツ州立大のHillel博士を訪問した時がきっかけだったと思います。忙しい合間を縫って、当時やっていたフィンガリングに関する室内や野外の実験、書いたばかりの論文の内容について、情熱的に説明していただいたことを記憶しています。フィンガー流という現象については、それ以前に、土木学会の水理講演会等で東工大の日野先生や東大の玉井先生がモデルを提示されたのを知っていましたので、むしろ水理学的な現象のイメージでした。Hillel博士の話聞いてもすぐにはピンと来なかったのですが、その後、オランダやイスラエルを訪問する機会があり、Hillel博士がやっている研究の話をしたときの研究者達の反応の大きさに接して、非常に興味をおぼえたのは確かです。帰国して、ために実験を始めたのですが、簡単につくれると思ったはずのフィンガー流が意外に難しく、なかなか作れず、どうしたらできるのだろうかと取り組み始めたのがスタートだと思います。当時は助手だったので、好きな時間を全て研究に費やすことができ、土壌物理学の勉強を一から始め、のめり込んでいきました。今振り返ると、本当に貴重な時間であったのだと思います。

今でもそうかもしれませんが、若いときには、何が本質で、絶対なのかということがいつも気になっていました。全ての事において回り道をするに対する恐怖心由来していたのかもしれませんが。時間は有限で、早い者が勝者

¹ 佐賀大学農学部

という論理は絶対であったように思います。養老孟司の「バカの壁」では、このことについて、自分が不変で、周囲が変わるといふ思い込みから来ていると言っています。日々変わっていくのは、実は人間である自分で、絶対なのは情報だと言っています。一度記録された情報は、記した本人が死んでも残っているし、時が変わっても内容は変わらないということです。逆に自分の中身は、生物学的にも常に変わっており、一時として同じ自分は存在し得ないと言っています。自分は、年を取れば必ず経験を積んで、今と違う自分がそこに存在しているのだという事実を認識すれば、絶対なのは自分が残した記録だけなのかもしれません。幸いにも、多くの読者は、論文という形で、良かれ悪しかれ記録を残す事ができる環境にいるわけです。論文が、自分がその時に存在した証として考えれば、将来の自分に対して絶対的な存在になるはずです。つまり、自分が頼れる絶対的なもの、これは思い込みでしかないのですが、これを追い続け、しがみつくのではなく、現在の自分をその都度、何らかの形で情報として記録に残していくことが大切なことではないでしょうか。土壌物理学会は、会員の皆様が、論文をはじめとして、現在の自分を情報として残していけるようないろいろな方法を提供していける場でありたいと思っています。

「若い世代に支持される学会」というのは、非常に重い課題ですが、楽しい課題でもあります。今後、会員の皆様とともに、生まれ変わっていきたいと思いますので、ご協力の程、宜しく願い申し上げます。